

戦史
叢書

一号
作戦

〈1〉 河南の会戦

防衛庁防衛研修所
戦史室 著

朝雲新聞社

戦史叢書

一号
作戦

〈1〉

河南の会戦

防衛庁防衛研修所
戦史室 著

朝雲新聞社

昭和四十二年三月十日 印刷
昭和四十二年三月二十日 発行
昭和四十四年二月十一日 増刷

戦史叢書 一号 作戦〈1〉 河南の会戦

定価二二〇〇円

著作者 防衛庁防衛研修所戦史室

発行者 中 島 義 雅

印刷所 日放印刷株式会社

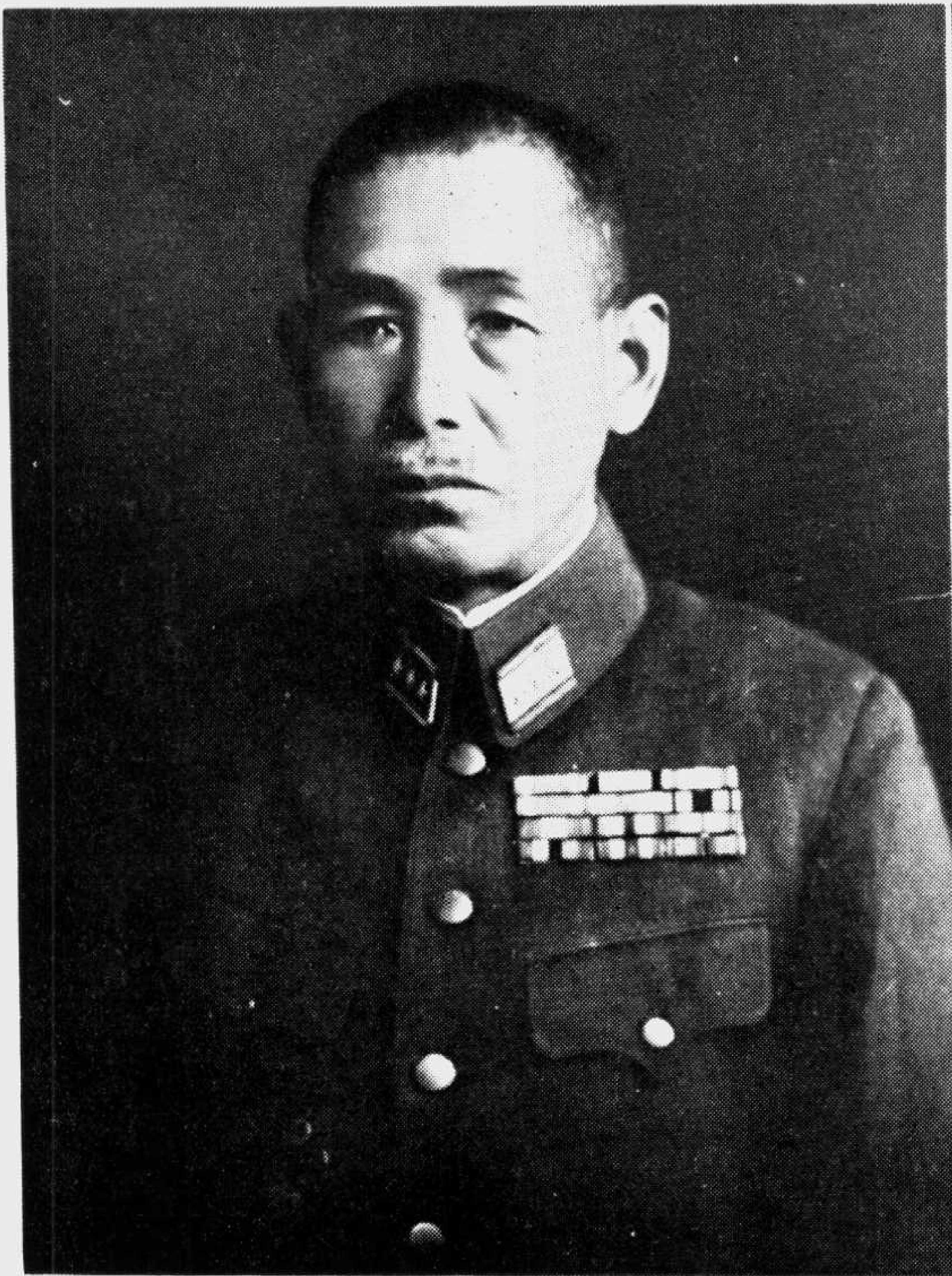
発行所 株式会社 朝雲新聞社

東京都港区芝栄町九 光輪会館
振替口座東京一七六〇〇番
電話(43)七三二番(代表)(43)六〇二六番

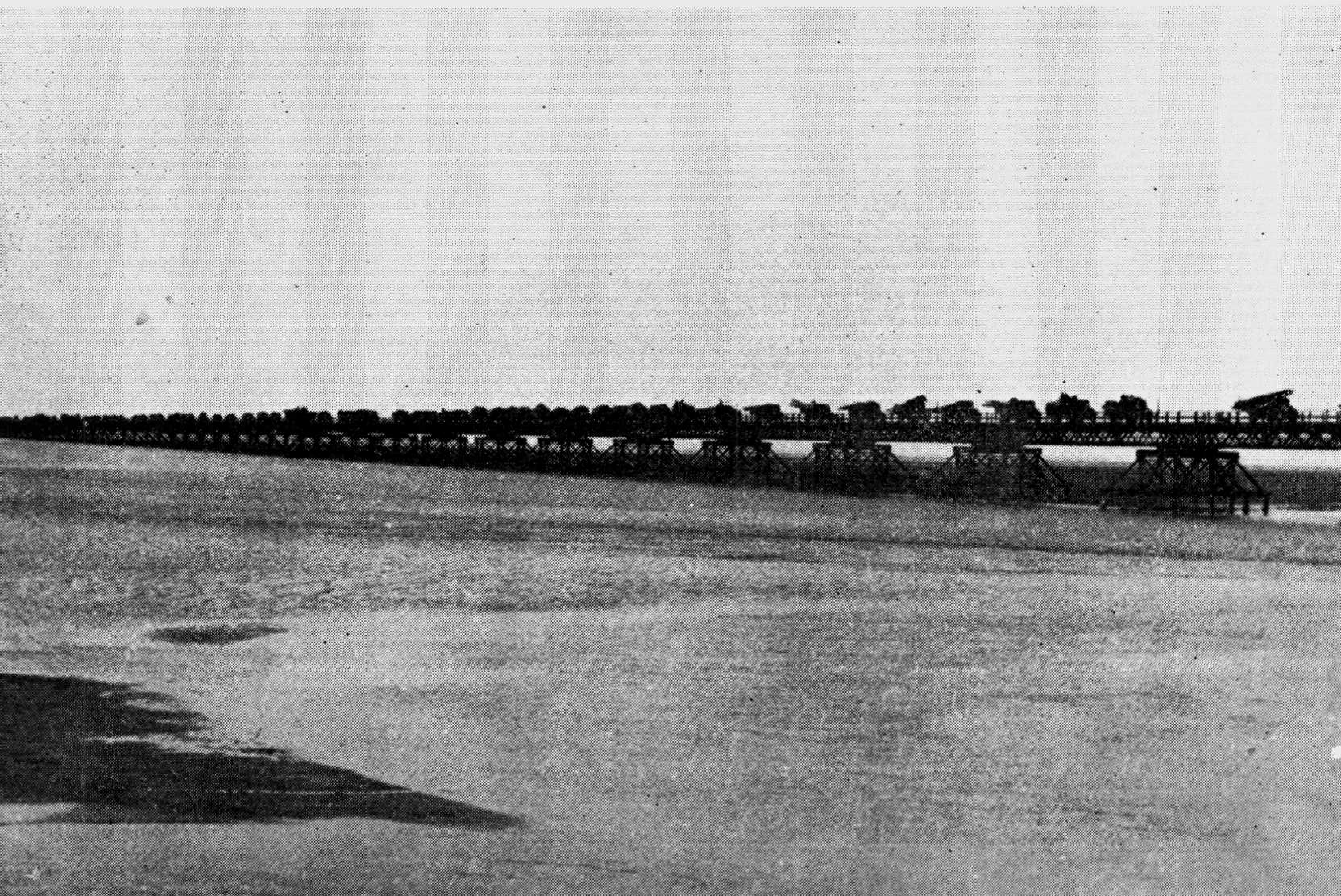
乱丁本・落丁本はお取替えいたします

支那派遣軍総司令官 畑 俊六大将

北支那方面軍司令官 岡村寧次大将



大黄河に架けられた甲橋 (3,050米)・渡るは車輛部隊





作戦を練る第十二軍司令官内山中将
(説明するは中村作戦主任参謀)



霸王城で作戦を指導する岡村大将
(報告するは折田第十二軍高級参謀)



右 霸王城を進発する第一百十師団の精鋭

下 霸王城陳地進入の野戦重砲兵

下 第三十七師団渡河正面の黄河





洛陽攻撃・突進する戦車



洛陽を望む（菊兵团正面）



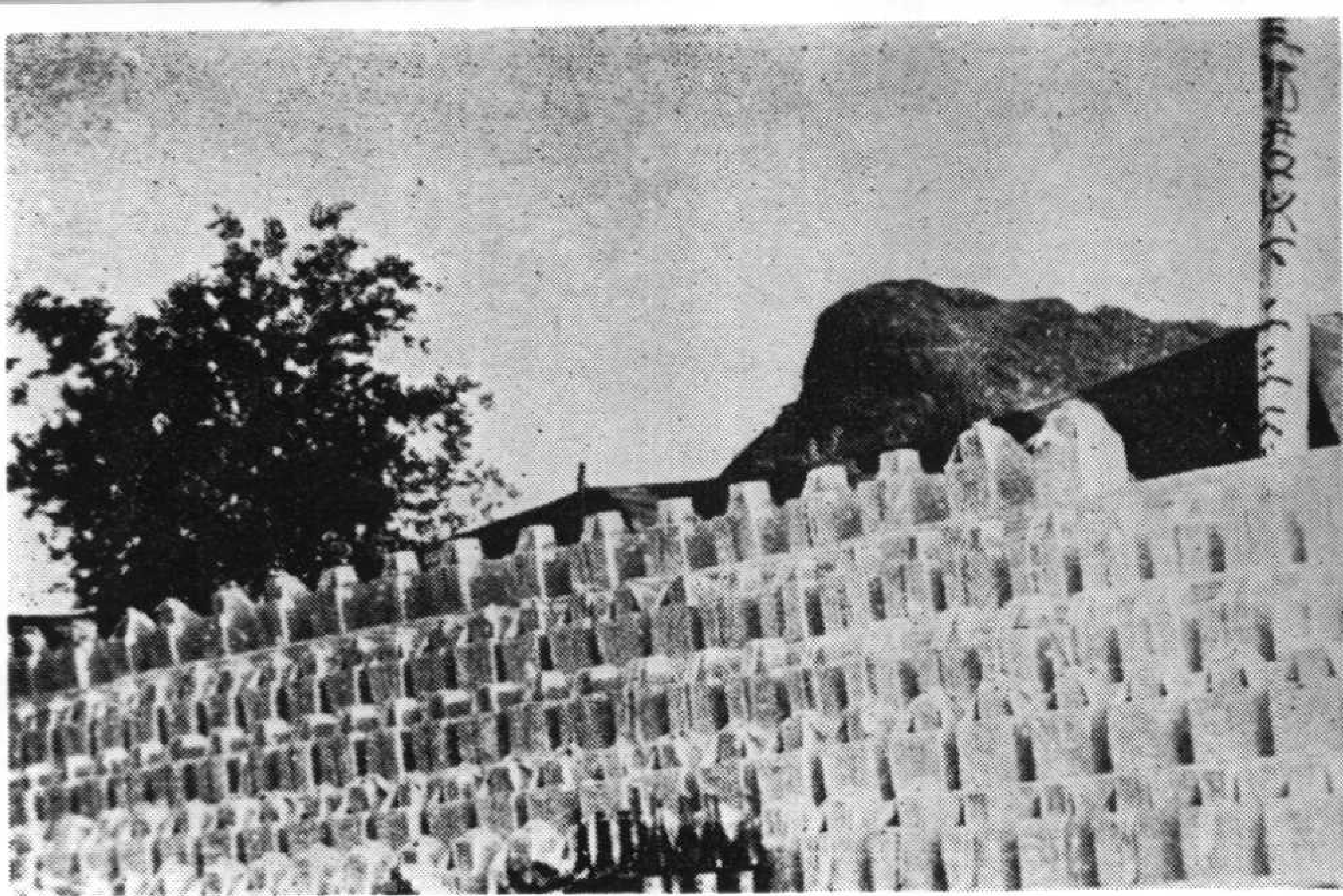
洛陽城の戦車壕を越えて市内掃蕩のため前進する戦車隊



洛陽東北角・突入点



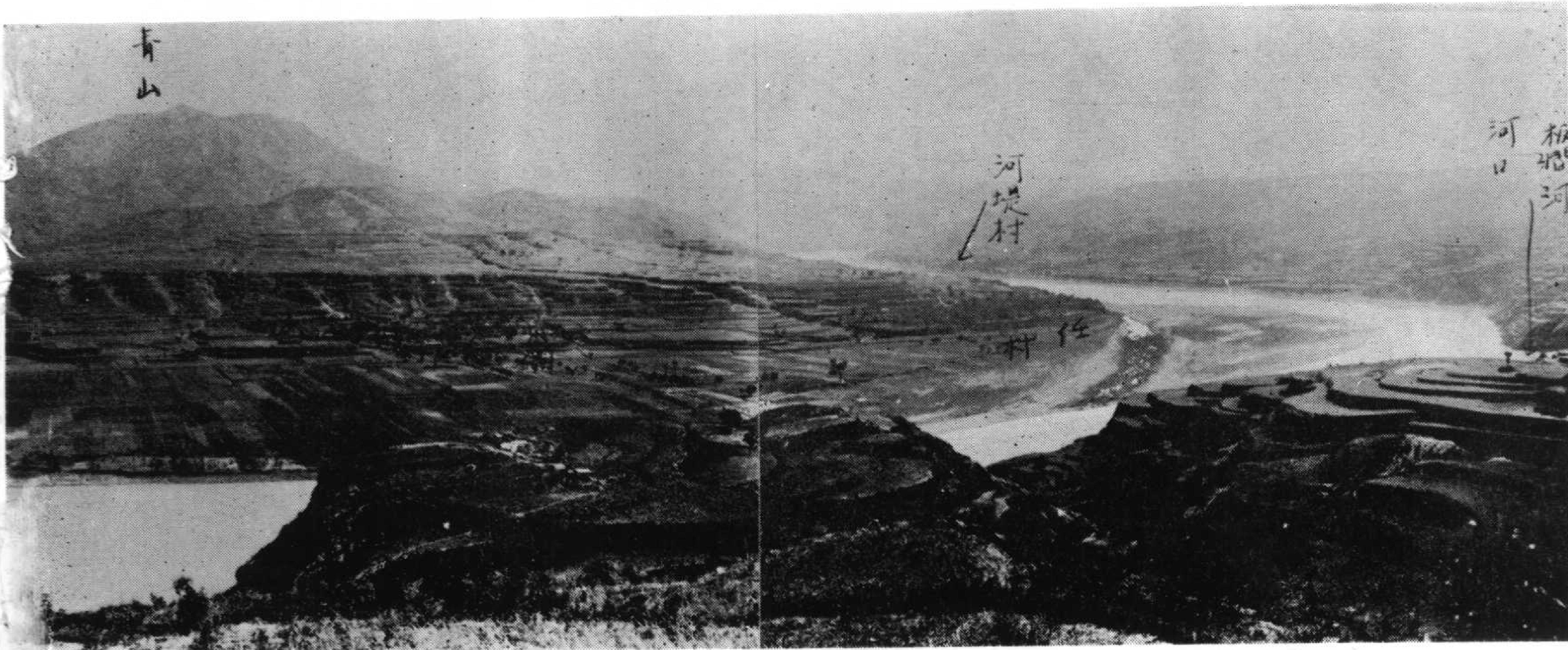
上 廃墟と化した洛陽市街
左 俘虜の大群（洛陽西営兵舎にて）



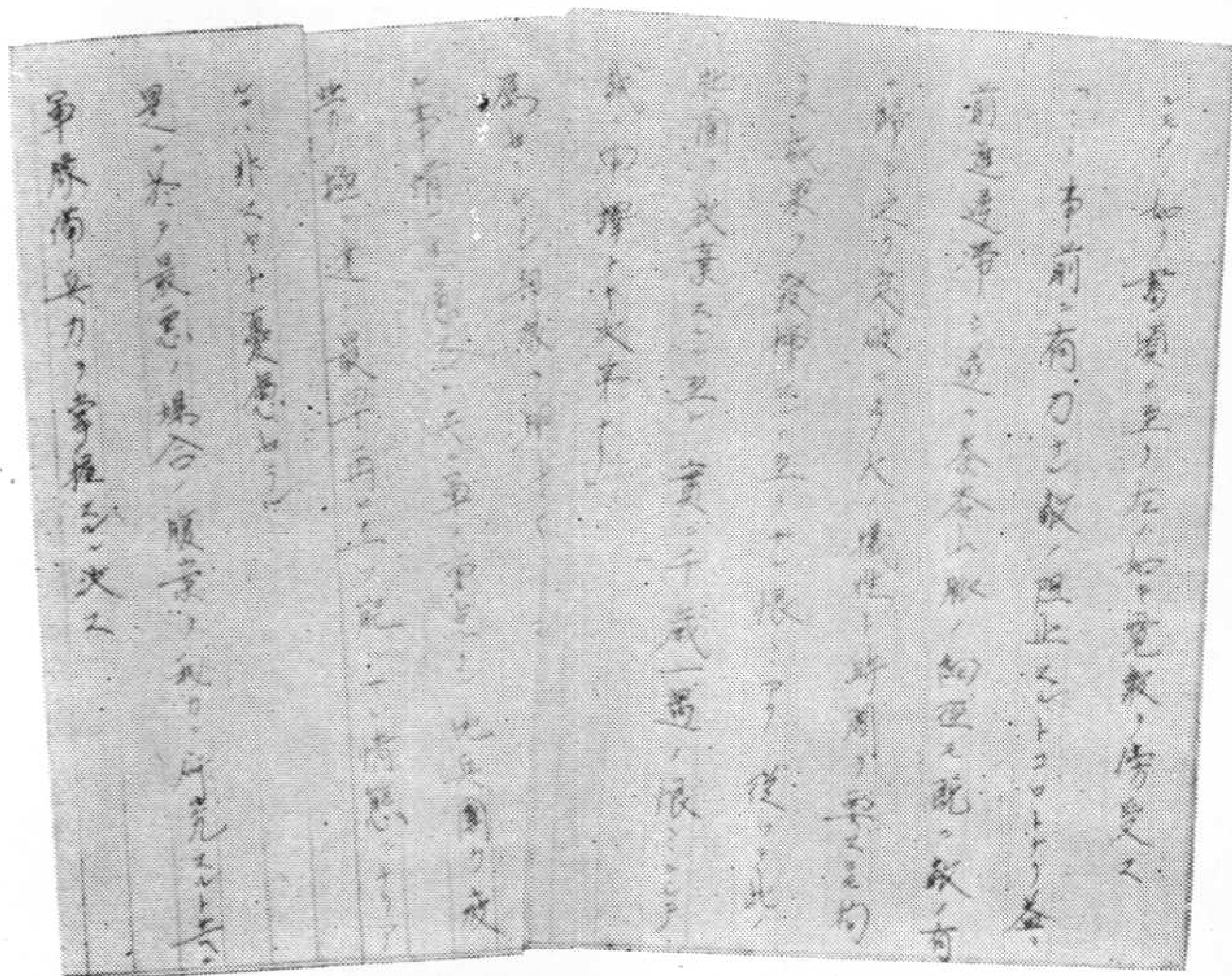
英 靈 奉 安（楚家屯）



戦場の支那家屋における吉本第一軍司令官



第一軍主渡河正面（趙家嶺戦闘司令所より）



第一軍機密作戦日誌の一部



大軍の攻撃を拒否した陰山廟陣地

序

戦史室が創設されて十年余、ようやくその成果の一部を、逐次刊行する運びとなり、「マレー進攻作戦」、「比島攻略作戦」及び「蘭印攻略作戦」に次いで、ここに本書を刊行することになった。編さんにあたっては、自衛隊の教育、または研究の資とすることを主目的とし、かねて、一般の利便についても配慮した。

終戦時において、大量の史料の消滅と散逸をきたし、そのうえ、戦史室の開設まで十年間の空白を生じたため、戦史編さんの困難さは既往内外のそれに比して、筆舌に尽くしがたいものがあった。ただ幸いにも、関係方面の理解と、多数歴戦者各位の熱誠あふれる協力とによって、この刊行を実現しえたものであり、ここにあらためて、深く謝意を表する次第である。

記述にあたっては、紙面の関係などで割愛したものも少なくない。また今後さらに、新たな史料の収集によって、加筆修正を必要とするものがあることも予想される。ひきつづいて、部内外の協力と叱正とを懇願してやまない。

本書は、戦史編さん官長尾正夫の執筆にかかるものである。
なお、本書記述の内容に関する責任は、戦史室長と執筆者のみにあることを特に付言する。

昭和四十二年三月

防衛研究所
戦史室長

西

浦

進

まえがき

一 支那派遣軍は、昭和十三年（一九三八年）末、武漢、広東の攻略を機として、その後は占拠地域内の治安の肅正に努めるとともに、随時短切な出撃作戦により中国野戦軍の撃破を図った。事変は長期にわたったが、遂に大進攻作戦を実現することなくして対米英戦争に入ったのである。しかるに太平洋の戦勢いよいよ我に非となった昭和十九年（一九四四年）春、にわかにつ^たって中国大陆を南北に縦貫し、仏印に連綴する一大野戦を敢行した。それは当時、中国大陆に進出中の米国空軍の基地を屠^ほって、わが本土への空襲を防止し、また東シナ海における海上交通を確保しようとするものであった。さらにまた、太平洋方面戦局の急迫化に伴い、南方所在の軍との陸上連絡を確保しようとするねらいもあった。

作戦は、華北（河南）に始まって、華中（湖南）、華南（広西）を経て貴州省におよび、また仏印、広東にいたるものである。大陸を縦貫打通することまさに一、五〇〇軒、総兵力約五一万が、重慶軍約一〇〇万を撃破して怒濤^{とう}のように大挙南下するさまは、まさしく世紀の大遠征と称しても過言ではなかった。しかし、また同時に、兵团素質の低下、作戦資材補給の逼迫^{ひつぱく}、とりわけ燃料の途絶などの悪条件とたたかいながら、米空軍の制空権下に行動しなければならなかったのである。作戦期間は昭和二十年（一九四五年）春におよんだが、この間、戦局の悪化につれ、支那派遣軍はその主力をもって、中国大陆に上陸を予想される米軍との戦鬪に備えなければならぬ事態を迎えるのである。

二 これらの作戦は、当時その全般を一号作戦と称し、華北における作戦を京漢作戦（略称 コ号）、華中、華南にお

ける作戦をそれぞれ湘桂、南部粵漢打通作戦（略称　ともにト号）と呼んだ。

本書は、まず一号作戦実施に至る経緯を明らかにするとともに、その全貌の^{ほう}うち、華北における作戦を「河南の会戦」として記述する。華中、華南における作戦は、それぞれ「湖南の会戦」、「広西の会戦」として、今後逐次巻をあらためて記述する予定である。

三　これらの作戦間、連合軍は中国、ビルマ、印度戦域においては、印支補給路（レッド公路）の打通とビルマへの反攻をめざし、重慶軍またその機動兵力をもって、ビルマへの出撃を敢行した。

また当時重慶軍は、対日戦争を遂行しながら、一面中共軍とも相對峙^じしており、その有力な兵団、第八戦区の胡宗南將軍の指揮する兵力をもって、西安北方地区で中共軍の本拠延安を監視させていた。コ号作戦の実施に任ずるわが北支那方面軍もまたそのころ急激に台頭増勢しつつあった中共党、軍に対して、全面的に治安の肅正作戦を展開していたのである。

一号作戦とこれらの諸情勢とは、太平洋方面戦局の進展とともに大きな関連があった。本書においては、これらの関連、ないしは影響についても、なるべく記述することにした。

凡 例

- 一日時は、一般に日本中央標準時刻によった。
- 二時刻は、午後一時三十五分、あるいは一三三五のように二つの表現方法を用いた。
- 三軍隊符号は、日本軍については、当時のものを使用するのを本則とした。
中国軍については軍までは正式に記述する。師以下にてはその番号を次のように略記する。

例 第三十七師第三十八団を第三七師第三八団と記述する。

- 四 日本軍の各軍、師団の秘匿略号および本作戦用として、特に設けた作戦用秘匿名称は次のとおりである。

本作戦用	秘匿略号	軍 または 兵 団
	総	支那派遣軍
	甲	北支那方面軍
	乙	第 一 軍
礼 進	仁	第十二軍
	戊	駐 蒙 軍
	呂	第十一軍
	登	第十三軍
	波	第二十三軍
	隼	第五航空軍（第三飛行師団）

本作戦用	秘匿略号	軍 または 兵 団
光	冬	第三十七師団
旭	石	第六十二師団
岩	鷲	第一百十師団
菊	陣	第六十三師団
天	勝	第六十九師団
極	極	第二十七師団
虎	瀧	戦車第三師団
成	成	騎兵第四旅団
山	北	独立混成第七旅団

部隊においては、通常「秘匿名称」に、配当された「数字番号」の末尾二桁の数字を付記して表示する。

例 第六十二師団独立歩兵第十二大隊は、元来「石第三五九三部隊」と呼んだが、本作戦においては「旭第九三部隊」とし、その命令を「旭九三作命第、号」と記述した。

五 引用原文中の読みにくい漢字には、適宜、ふりがなをつけた。ただし中国の地名は、特に重要なもののほかふりがなを省略した。

六 () 内のアラビア数字は、史料の出所を示し、巻末に一括掲記した。

目次

序

まえがき・凡例

序章 一号作戰実施の経緯と発令……………一

一 検討から内定まで……………一

作戰検討の発端 (1)

昭和十八年秋、支那派遣軍の状況 (4)

敵情特に重慶抗戦の状況 (7)

検討開始から兵力内示まで (9)

支那派遣軍への連絡 (9)

派遣軍の検討と第一次報告 (12)

大本營の兵力内示 (15)

作戰実施の決定と現地案大綱策定まで (16)

虎号兵棋の実施 (16)

省部の検討と内定 (21)

派遣軍計画大綱案の策定 (23)

二 大本營の発令と作戰準備……………二

作戰目的——在支米空軍の跳梁封殺へ (26)

中国方面航空状況 (27)

作戰目的の確定 (28)

大命の允裁発令 (31)

支那派遣軍へ伝達 (32)

三 支那派遣軍作戰計画の策定……………四〇

兵備と運用 (40)

作戰準備の指示と連絡 (45)

南方軍との連絡 (46)

支那方面艦隊との連絡 (48)

関東軍との連絡 (48)

支那派遣軍作戦計画の策定 (49)

敵情判断 (50)

一号作戦計画 (51)

大本営への報告 (57)

四 第五航空軍の新設と作戦計画……………五

五 C B I 戦域連合軍の対日戦略……………六

在支航空部隊の増強 (58)

河南の会戦

第一章 作戦準備……………三

一 北支那方面軍の態勢……………三

敵情一般、特に第一戦区の状態 (78)

対共治安の状況 (74)

湯恩伯副長官指揮下の部隊 (82)

軍の編制と装備 (82)

素質、戦法など (82)

二 方面軍の進攻決定と

兵力の配置と動向 (83)

その作戦構想……………六

方面軍の作戦構想の決定 (83)

北支那方面軍の進攻への決定 (76)

三 方面軍の作戦準備……………六

兵団長会同 (87)

進攻兵団と後方警備兵力 (88)

軍直部隊の転入と進攻兵団編成の強化 (89)

黄河架橋の復旧と防空 (92)

霸王城、中牟付近陣地占領部隊の状況 (96)

工兵特別訓練 (98)

兵站集積 (99)

四 第十二軍の作戦準備…………… 一〇一

第十二軍司令部の強化 (101)

第十二軍の作戦準備 (102)

第十二軍「コ」号作戦計画 (105)

作戦兵団とその作戦準備 (108)

第一軍の策応と準備 (116)

作戦構想と兵力の内定 (118)

作戦兵団の状況 (120)

五 作戦発令とCBI戦域

連合軍の状況…………… 一〇三

作戦発令 (120)

一九四四年春、CBI戦域連合軍の状況 (123)

第二章 黄河河畔会戦経過の概要…………… 一〇五

一 中牟方面の渡河攻撃準備…………… 一〇七

攻撃計画の策定 (130)

渡河準備 (142)

攻撃命令の下達 (146)

独立混成第七旅団の状況 (152)

騎兵第四旅団の状況 (153)

二 霸王城正面の攻勢準備…………… 一〇九

集中および開進配置の大要 (154)

兵站の現地準備 (155)

展開および攻撃準備 (156)

攻勢発令と戦闘司令所の設定 (170)
第五航空軍の協力準備 (171)

三 中牟方面の攻勢開始……………一七三

攻撃開始 (四月十八日の状況) (173)
四月十九日の状況 (175)
樹頭村付近の戦闘 (176)
鄭州挺進隊の行動 (179)

四 霸王城正面の攻勢……………一八三

第二十七師団の陽動 (182)
魔鬼頂高地の占領 (183)
中央突出角「サクラ」陣地の攻略 (185)
方面軍の報告と第十二軍の動き (186)
第六十二師団四月十九日夜

威力偵察を企図す (187)
同 右 威力偵察の状況 (189)
独立歩兵第十二大隊の戦闘 (189)
独立歩兵第十四大隊の戦闘 (196)
索須河の線へ追撃進出 (198)

軍の作戦指導 (200)
鄭州付近の戦闘 (201)
報告 (203)
感状の授与 (205)

五 第十二軍主力の密縣

新鄭の線進出……………二〇九

第十二軍の作戦指導 (207)
第三十七師団の密縣挺進隊派遣と
新鄭への進出 (209)
独立混成第七旅団の新鄭攻略 (212)
第六十二師団の進出 (212)
第一百師団の栄陽攻略 (213)
第三十七師団鄭州挺進隊四月二十二日の行動 (214)
第一百師団の崖廟付近の攻撃 (215)
第三十七、第一百師団の密縣攻略 (216)
第十二軍の処置 (217)
第三十七師団密縣挺進隊の追撃 (218)
同 右 の武勲 (219)
第一百師団の密縣進出 (220)